

歩き疲れたのでゆっくり昼食をとり休憩することになった。食後は、「偽満皇宮博物院」に行くことにした。この博物院にある日本語版のパンフレットを見ると、「偽満皇宮は、東北淪陥(占領されること)十四年史、偽満皇宮宮廷史及び東北人民抗戦史の研究センターであり、文物資料の所蔵・研究・展示センターである」と書かれている。この場所こそ溥儀が新宮殿(前述の地質宮)完成までの仮宮殿として執務し、生活していた皇宮である。つまり新宮殿は完成しなかったため、1932年から1945年の14年間仮宮殿で過ごしたわけである。

ここでこの「偽」という字について思ったことを率直に書いてみたい。辞書には ①にせの、②非合法の、と2つの意味が書かれており、②の例示として「偽政府」は日本語では傀儡政権とある。これからすると「偽満州国」は非合法の国、或いは傀儡政権の国という意味と受け取れる。たしかに満州国は、関東軍がラストエンペラーの溥儀をかつぎあげた傀儡国家ではあった。中国も「満州国」が傀儡国家であることを強調するためにこのような表現にしたのであろうが、タクシーに乗り博物院の前で下りてこの看板を見た時には違和感を覚えた。

私からすれば、満州国は、日本人はほとんどの人が傀儡国家であったと認識しているのだからわざわざ「偽」の字を加えなくてもよさそうなものと思ったのだ。そのように思った理由は他にもある。中国の東北地方(南部を除く)は、古来漢民族から見れば辺境の地、異民族が住んでいた土地である。高句麗や渤海そして金という国などが興亡をくり返した。高句麗については、2004年頃だったか中国が「高句麗の歴史は、中国の一地方史である」と強弁し、韓国から猛反発を受け、この主張には無理があると悟ったのかそのうち引っ込めている。

この地方は10世紀ころにはツングース系の民族である満州族(女真族)が移り住んだ。そして瀋陽に立派な故宮を造営し、1636年に国号を「清」としたのである。そして1644年明が滅び、北京に入城し、清の時代となったのである。つまり漢民族も少しは住んでいたのではあろうが、1949年まで漢民族の国はなく、むしろ彼らから見るとこの地方の民族を「胡」と呼び外国人扱いしていたわけである。

従って満州族の人たちから偽満州国と言われるなら納得するが、共産党がもし「偽」という文字をつけたのであれば、スッキリしないと言えば屁理屈であろうか。「偽」に



偽満皇宮博物院正面入り口



勤民楼

ついていろいろ述べて来たが、博物院の中がどうなっているのか見てみよう。

入口で入場券を買って中に入ったが、かなり広そうどころから見ていけばいいのか分からない。13万7千m<sup>2</sup>余り(約4万1千坪)とパンフレットには書かれている。なにしろ入ってすぐにのところに溥儀が使用していたのか、ちょっとした競馬場がある。そこを左に見ながら右奥から入っていく。すると「勤民楼」という建物の前に出た。

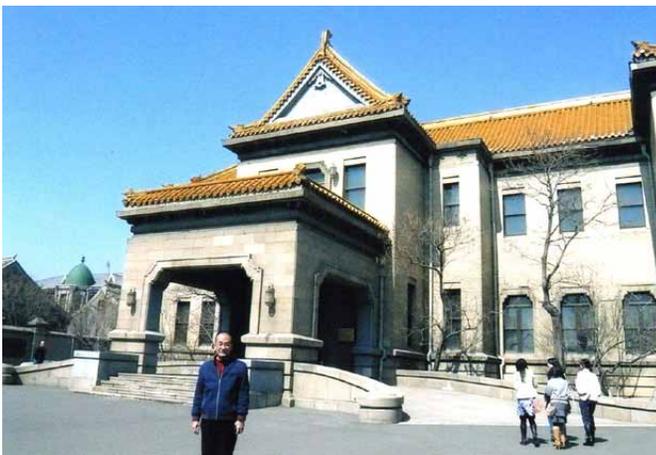
説明書には次のように出ている。「皇宮の主要な建物の一つ。もとは東北地方の塩の専売の役所。1932年溥儀は、偽満州国執政に就任した後、清王朝回復の大志を示すために、『天を敬い、祖に則り、政に勤め民を愛す』との清王朝の家訓により「勤民楼」と命名した。この建物は、政務、式典挙行、来賓接待、祭祀従事などの場所とした」とある。2階建てだが入口がとても印象的で、建物から飛び出すように作られ、屋根はドーム状になっている。この建物も一度見ると脳裏に焼きつくようなデザインである。この勤民楼には、満州国皇帝の玉座があり、荘厳な雰囲気包まれ、

皇帝にふさわしい場所となっている。

続いて中和門をくぐりぬけ「緝熙楼」に出る。この建物も主要な建物の一つで昔はやはり塩の専売の役所の本部だったところだ。溥儀の宮殿が間に合わずとりあえずこうした役所の建物を利用したようだ。ここは溥儀および皇后の婉容、皇妃の譚玉齡<sup>たんぎょくれい</sup>の住まいだったところ。ちなみに溥儀は亡くなるまでに五人の妻を迎えている。

2階の溥儀の生活コーナーは、寝室、書斎、薬庫、仏堂などがある。彼は小さいころから体が弱くいつも薬が手放せなかった。また2階の東側に婉容が使用した寝室、客室それにアヘン中毒だった彼女にはアヘン吸引室まである。寂しい一生を送ったようだ。この建物は満州族の皇族の生活を伺うことが充分できるが、常に寂しさを感じさせる。「緝熙」(光明の意)とは、詩経の大雅編の中の文王の徳を称える詩から引用したもので、パンフレットによると、「片時も清王朝の祖業の回復を忘れず」という意味を込めて命名したとある。溥儀が心の中では清の復活を強く願っていたことがこれからも分かる。7歳の時だったとはいえずトエンペラーとなった溥儀としては、大清帝国の再興を強く願うのは当然のことだろう。

維熙楼を出て、長春門をくぐり少し歩いたところに同徳殿という名のとても貫禄のある建物が目に入ってくる。この宮殿は塩の役所ではなく日本人による設計で1938年に完成した。今まで紹介して来た建物のほとんどが1930年代の後半に完成または建築に着手しているが、まさか7～8年後にすべて明け渡すことになろうとは誰も考えなかったに違いない。同徳殿は溥儀と婉容の住居用として建てられたのだが盗聴器が仕込まれているとの疑いを持った彼はここを利用することなく終わった。映画「ラストエンペラー」で使用された天井が高く中国風のシャンデリアが美しいホールもここにある。2階建てだが黄色の屋根瓦とどっしりとした造りは皇帝用の住居らしい雰囲気



同徳殿

持っている。

建物はまだいくつもあるが、主要な建物は以上の三棟である。この博物院にはその他に1万m<sup>2</sup>の広さをもつ東御花園という日本人の園芸家の設計による庭園や溥儀が使用したであろうプールがある。そして万一戦争が起きた時のために、東御花園に隣接して地下の防空壕まである。長い階段を下りるとコンクリートで頑丈に造られた部屋を見学できる。この広大な博物院を巡って歩いていると、溥儀はここでどのような気持で日々を送っていたのだろうかと思わずにはいられない。自分の力では如何ともしがたい籠の鳥にすぎず、常に関東軍の命令下に置かれ、ただ歴史に流されていくしかない中に置かれた彼の心中はどのようなものだったのであろうか。

なお、第2次世界大戦終了後、溥儀は弟の溥傑と共にソ連軍に身柄を拘束され、ハバロフスクで一時収監された後、1950年に瀋陽近くの撫順にある戦犯管理所に収容された。そして1959年特赦により、釈放された後は、中国共産党に思想教育を強制された後、一市民として静かに余生を送った。お気の毒な生涯であったといえよう。

長春の旅は終りに近づいて来たが、最後に私がどうしても見てみたい「長春電影制片廠」に向った。長春は映画の都でもある。この制片廠(映画制作所の意)の前身は、満州映画協会、略して満映という。この満映が中国の映画の主要なルーツの一つとなり多くの映画人を輩出した。満映は満鉄の一部門でスタートし、関東軍の広報の役割をしていたが、1937年に満鉄から分離独立した。独立当初は満州国の正当性や日満親善に関する映画を作っており業績は不振が続いた。その建て直しのために迎え入れられたのが甘粕(元憲兵大尉)だった。映画「ラストエンペラー」で坂本龍一が甘粕を演じたのでご記憶の方もあろう。彼は改革を断行したが、李香蘭という名女優を発掘し、数々の主演映画をヒットさせたこと等で一気に優良会社となったのである。満映といえば甘粕理事長と李香蘭を思い起こす人が多いと思う。そのように思っていたが、先日「つたや」に行き、「李香蘭我が半生」という本があるかどうかカウンターの40歳台と覚しき女性に聞くと、「李香蘭」って何ですかと聞き返され軽いショックを受けた。もう40歳台以下の人の多くは彼女を記憶にも留めていないのかとガッカリしたのである。この二人については少し紙面を割こうと思う。

甘粕元憲兵大尉は、1923年にアナキストの大杉栄と内妻と甥の三人を憲兵隊本部に強制連行し、三人とも殺害した甘粕事件を起こしたことで有名である。軍事法廷で

禁固10年の刑を言い渡されたが、三年で出所しなぜかフランスに留学する。その費用はなぜか陸軍から出ていたという。帰国後は大連に住んでいた。満州事変前後、裏で軍と関わり、ある日突然満映の理事長になった。そして元軍人なのに満映の建て直しに才能を発揮する。改革の中で中国人スタッフの給料引き上げや中国人俳優の給料を日本人並みに引き上げることを断行した。なかなかできないことであった。彼は日本の敗戦が決った翌日、満映の事務所で服毒自殺を遂げている。盛大な葬儀が満映で行われたが、中国人だけで三千人が参列したといわれるほど中国人に慕われたという。事件を起こした甘粕と、満映で辣腕をふるった甘粕となかなか結びつかないが、何かと謎の多い人物ではあった。

次に李香蘭についてその人生をふり返ってみたい。彼女は1920年に満州の撫順で生まれた。まだ健在である。中国名で女優になったが、生粋の日本人で本名は山口淑子という。彼女の彫りの深い日本人離れした美しい容貌は世の男性を魅了せずにはおかなかった。父は佐賀県出身の中国語教師で、淑子の中国語の先生でもあり、厳しく指導したそうだ。女学校時代に瀋陽銀行総裁の李際春の養女となり「李香蘭」という名前をつけてもらった。彼女はこの名前がとても気に入ったという。名前の中国語での発音の響きがとてもよいからという。14才の時、北京に北京語の勉強のため留学もしている。そのためか、彼女の中国語はとても美しく、映画を見た中国人も彼女を中国人と疑わなかったという。

18才で初来日。「日満親善」のシンボルとなり日本でも東宝や松竹の映画にたくさん出演している。時代背景を反映した国策的な映画に美男俳優であった長谷川一夫との共演で次々とヒットを飛ばし、人気は留まるどころを知らなかった。特に有名なのが、1941年2月11日(当時紀元節)の「日劇7まわり半事件」である。その年の12月に真珠湾攻撃で日米開戦となる戦争突入必至の情勢の中、娯楽も制限されたとはいえ、「歌う李香蘭」見たさに国民が入場券を求めようと日劇のまわりを7周半も並びケガ人も出た事件である。その数約10万人だったという。

戦後は山口淑子と名乗り、映画も「暁の脱走」や「夜来香」が評判を呼んだ。そしてハリウッドに進出。彫刻家イサム・ノグチと出会い結婚、そして離婚。のち政界に転じ参議院議員となる。外交官の大鷹氏と結婚したので大鷹淑子として政治活動をしている。ざっと振り返っても華麗な、しかも波乱に富んだ人生を送って来たことがわかるであろう。

彼女の人生は、前述した「李香蘭わが半生」に詳しい。も

う20年くらい前だったと思うが、日経新聞の最終面にこれが連載されたのを読んだが、今は内容をほとんど忘れたのでこの長春市を書くに当り「ツタヤ」に行ってこの本を求めたのだ。

さて「長春電影制片廠」の入口に立ち、ここが一世を風靡した李香蘭の映画を撮っていたところなのかと感激した。しかし時の流れはすべてを遠くに押し流してしまうものだと思わずにはいられない。門番がいたのでガイドに交渉してもらったが中には入れてもらえなかった。理由はよく分からなかった。仕方なく門扉を通して中を見るとなだらかなスロープの向こうになぜか大きな白い毛沢東像が立っていた。

そのうち日はとつぷりと暮れてしまった。ガイドに夕食を付き合ってもらい、早めに長春駅の待合室で少しゆったりし、22時20分の特急寝台車に乗り大連に向った。



第2次世界大戦で日本が撤退してから吉林省の省都は再び吉林市となった。吉林省の名称は吉林市からとったものでもあろうし、長春市は、満州国の首都のイメージがあまりにも強すぎてそうだったのであろう。しかし1954年に長春市を省都とした。理由は、長春市は吉林市より遙かに近代的な街であり、行政施設も十分に揃っていたためという。その後産業基盤の整備も進み、「中国第一汽車集団公司」という従業員も10万人を超える一大自動車メーカーもここに大拠点をかまえた。たしかトヨタやマツダとも提携し、中国の自動車業界をリードしている。しかし大連に比べ、近くに港を持たない長春は今後どのように発展していくのであろうか。長春はあまりに満州国時代の街の骨格が色濃く残っており、それを払拭して一皮むけた発展をするのは容易ではないであろう。そのようなことを考えながら眠りについた。



地質宮を背に前は文化広場、左奥に尖った屋根の国務院、右前方に軍事部旧址が見える。私が一番長春らしい風景と思うところだ。